

翻  
訳

アラン・ジュフロワの最後の／最初の言葉

笠井 裕之／訳

質問

I

またひとつ微笑みを

縊子に

わたしは見る

赤いブルゾンの袖を

白い床を

動くカーテンを

驚くべきこと

わたしはいまも生きている

あなたもまた、幸いなことに——

さもなくば、わたしは風のなかに消えていたことだろう。

*Encore un sourire*

II  
ユートピア

またあらたな九年を耐え忍ばなければならないのか？

九つの春、九つの冬を

質問がある

なにゆえさらに九年なのか、

どうやって引き出せばよいのか、あたらしいもの、なくてはならぬものを？

亀は歳をとって才覚を増すだろうか？

蜥蜴とかけは、象は？

恐竜は体が大きくなって知能も発達させたのだろうか？

みな泥に飲みこまれたのではなかったか？

大事なのは、立ったまま生きて死ぬことではないか、

二本の足で？

III

ほかの質問

あちらの水とこちらの水を泳いで渡る

身のほど知らずというものか？

親マスターキー鍵になるのは狂気の沙汰か

たった二枚の扉もないのなら？

これだけは譲れない、「永遠の権利」をすべての人に

だれもが自分の「一切」を、ただひとつの「屋根」を！

しかし「一切」は「どうでもいいもの」と同じではないか？

OTHER QUESTION

IV

家族写真

ブローリーニユの森

山高帽をかぶった父

粹で風采のよい姿

赤ん坊を抱いているのが母

赤ん坊は弟

口ひげをたくわえた祖父

退役した憲兵で「アラブ野郎」が大嫌い

陽射しに顔をくしゃくしゃにして

輪回しの輪とバトンを握っているのがわたし

それからもうひとり、笑みをうかべて

ひとときわ目を惹く美しい女性

それが叔母

誘惑するものすべてを書きしるすようにと

この詩の作者を励ましてくれたひと

破局のシナリオ

ゆえに効果は絶大、一触即発の爆発物だから。

V

大いなる人、種田山頭火に

中層上層の社会の場景

ありとあらゆる孤独が蔓延している

乳房をもつ社会は壊滅

そのありさまは、まるで（糞くらえ！）

——自殺する S O S ——

わたしより先に世界が息たえるかのよう、それにしても

この世が減んだら、わたしの生きる場所はどこにある？

フランスは雪に埋もれて跡形もない

中国は月に入植

日本の行方は何処とも知れず

貧乏人はブラックホールに厄介払い？

わたしは——そのとき——いのち生命の孤児となるのだろうか

愛する人と一緒に

小さな蟻になって

それでもなんと幸せなこと

わたしたちはみな同じ蟻にほかならず  
すべてはついに原初の太陽にたちかえるのが定めだ

*Au grand Tameda Santoka*

桐村茜との詩画集のための詩 二〇〇九年

*Questions*  
(1)

## 不在の扉を通りぬける

幸いなことに 奇跡によって 静けさへの配慮によって 不幸への欲求によって 仲間を思う心  
によって 卑劣さによって 犠牲になろうとする狂おしさによって 諦めによって 分別のない  
衝動によって 幸いなことに 千の衝動によって 幸いなことに 三十億の衝動によって なん  
ということ 十萬回のなんということ 愚かしさによって 熱情によって 幸いなことに 十萬  
回の愛によって 官能のよろこびによって なんということ 千回のなんということ 四千回の  
偶然によって

わたしは通りぬけた

わたしは通りぬけなかった

わたしは通りぬけることを拒む

わたしは通りぬけることをみずからに課す

わたしは通りぬけようとしていると思う

わたしは通りぬけないことを怖れる

なんということ

いくつもの扉の後ろのいくつもの扉を通して

「七つ目の扉」の不在を通して



なにも現われない「穴」を通って

なんということ  なんということ  なんということ

千回のなんということ  美術館のわたしの警備員ガルドイヤン

トウーサン・ルーヴェル(2)の三六五の扉の親愛なる看守ガルドイヤン

ソマーヌ一二〇日(3)のいとも親愛なる守護者ガルドイヤン

なんということ  なんということ

わたしは通りぬけなかった

それでも  とめない滝の扉を通って  潰走のうちに運び去られたいくつもの扉を通って  一枚

また一枚と打ち破られた扉を通って  古い破船の船倉を通って  わたしの体内を通って  わたし

の頭部を通って  わたしという瀑布を通って  不在そのものの扉を通って

わたしは通りぬけた

わたしは通りぬける

わたしは通りぬけることをけつしてやめない

一九六二年

*Passer par l'absence de portes*  
(4)

「その日、総子に読んでもらうために」

親愛なる友たちよ、

「最後の言葉」は好きではありません。これは「最初の言葉」、わたしが向こう側に、無のなかに旅立って、はじめて語る言葉です。あなたがたにお礼を言うために。わたしのためにこれまでしてくれしたこと、これからしてくれることすべてに。いやそればかりでなく、あなたがたが成し遂げてきたすべてに、そしてわたしがいないところで、ときには不可能に挑みながら、成し遂げるであろうすべてにも。あなたがた自身の生命いのちを生きながら、新しいものを作りあげながら、夢みながら、思考を新たにしながら、そしてそれがまさしく必要なことであるゆえに、世界を変えることに思いを凝らしながら。

おかしなことですが、もはや生存していないと言いたてたところで、それこそ仕方がないことなのに、早くもあなたがたがいなくて、さびしくてたまらない。あなたがたがいなければ、わたしはもっと早くこの世を去っていた。あなたがたがいなければ、わたし自身の生命はひとつの不在でしかなかった。わたしはあんなに笑わなかったし、あんなに書きもしなかった。あなたがたがわたしの活力エネルギーと呼んでくれたもの、それに力をあたえてくれたのは、あなたがたの友情です。そ

うでなければ、わたしはあれほど愛することもなかったでしょう。木を、花を、犬を、馬を、猫を、鳥を、海を。またあれほど旅をしなかったし、いまはもういない、それでもあなたがたと同じくらいわたしの頭を離れない、ほかの友人たちと出会うこともなかったでしょう。

わたしはもう、そのすべてを返すことはできない。あなたがたひとりひとりがわたしに与えてくれたものを。生命への愛を、自由への愛を、わたしの外にあつて現実であつたもの、生きていたもの、それら一切に目を開かせてくれたことを。どうかわたしが死んでいないかのように振る舞ってください。なぜなら、死とは、実は生きているあいだけの、愚かな幻にすぎないのだから。わたしは数えきれない死のおかげで生きてきました。それと同じように、わたしが地下に埋もれている、そのことよつて、生きてください。ことばと事物はわたしたちにひとしく共通の宝です。こちらでも、あちらでも。わたしたちが人間の世界に実在していても、いなくても。流れてゆく雲はそのことをよく知っている。雲もまた、わたしたちに語りかけているのです。安息という美しい嵐のさなかにも。

敬意と友愛の思いをこめ<sup>(5)</sup>。

あなたがたの友、アラン・ジュフロワ

[À lire par Fursako, le jour dit]

## 訳者付記

アラン・ジュフロワがこの世を去ったのは、二〇一五年十二月二〇日のことだった。フランスでは多くの新聞、雑誌がただちに訃報を伝え、戦後のフランスを代表するこの詩人・批評家の死を悼んだ。日本では、ジュフロワと親交があった慶應義塾大学文学部の市川崇氏が精緻な追悼文を『三田文学』に寄せた。<sup>(6)</sup>ジュフロワは一九八三年から一九八五年、在日フランス大使館の文化参事官として日本に赴任したことから、日本とは特に浅からぬ縁があり、日本の文学と芸術に——古典から現代詩にいたるまで——深い造詣があった。朝吹亮二氏と「共同詩」の可能性をめぐって対談したのも日本に滞在中のことだ。<sup>(7)</sup>

訳者は一度だけジュフロワと親しく接する機会を得た。画家・版画家の桐村茜氏との詩画集『質問』(Questions)の日本語訳を担当したことから、二〇一四年の春、詩画集の見本を携えた桐村氏とパリ二〇区のアパルトマンを訪問したのである。その詩画集に収められた五篇は、ジュフロワが生前に公表したおそらく最後の詩篇となった。

パリのペールラシェーズ墓地での葬儀のとき、妻の総子さんによって、ジュフロワが生前に用意していた友人たちへの手紙が読みあげられた。それからひと月ほどして、美しい葉(折りたたまれた紙のオブジェ)が会葬者のもとに届けられた。そこにはジュフロワの洒落なデッサンと、代表作のひとつ「不在の扉を通りぬける」、そしてあの別れの手紙が採録されていた。

ジュフロワが最後の扉を通りぬける前に残したこれらのテクスト——とりわけ特別な意味が託された別れの手紙——の翻訳を快くお認めくださり、訳稿にも丁寧に目を通してくださったジュフロワ総子さんに深く感謝申し上げます。

笠井裕之

## 註

- (1) Alain Joffroy, Akane Kimura, *Questions*, Paris, Editions R.L.D., 2015.
- (2) フランソワ・ドミニク・トゥーサン・ルーヴェルチュール François-Dominique Toussaint Louverture (一七四三—一八〇三) はハイチの独立運動指導者。元の名はトゥーサン・ド・ブレダ「Toussaint de Breda」。「ルーヴェルチュール」(Louverture (Pouverture)) にはフランス語で「開くこと、開口部」の意味があり、彼が敵軍の守備に突破口を「開く」戦略に長けていたことがこの名の由来と

される。ナポレオン独裁下のフランスで獄死した。

(3) マルキ・ド・サドの小説『ソドム一二〇日』を想起させる。ソマースは南仏プロヴァンス地方ヴォクリューズ県の村。サドはこの地で幼年時代を過ごした。

(4) Alain Joffroy, *C'est aujourd'hui toujours* (1947-1998), Paris, Éditions Gallimard, 1999, pp. 77-78.

(5) 原文では「*Salut et fraternité*」。十八世紀の革命期に手紙の結語として用いられた。

(6) 市川崇「アラン・ジュフロワの死を悼む」、『三田文学』第一二五号(二〇一六年春季号)、三田文学会、二八一―二八七頁。

(7) アラン・ジュフロワ、朝吹亮二「超」言語的に、超」文化的に」、『現代詩手帖』一九八五年九月号、思潮社、二二四―二二七頁。